ウィズコロナ時代の中小企業経営

歴史に学ぶ

第四回 〝戦国最弱〟でも戦い続けた不屈の大名・小田氏治（おだうじはる）

大阪経済大学客員教授・経済評論家 岡田 晃

戦国時代、負けてもあきらめずに戦い続けた武将がいた。南常陸の小田城（現在の茨城県つくば市）を本拠地とした小田氏治（一五三一または一五三四～一六〇二）である。勝利した戦いもあったが、ここぞという重要な合戦ではことごとく大敗を喫し、最後には領地をすべて失ってしまった。このため「戦国最弱の大名」と呼ばれる。だがそれでも敵に降伏せずに抵抗を続け、奪われた城の奪回に一時は成功している。戦国大名としては知名度が低いが、その不屈の戦いぶりを知ると、現代の私たちも勇気づけられる。

北条・結城連合に惨敗、城を奪われる

小田氏はもともと関東の名門だった。初代の知家（ともいえ）（当時の名字は八田（はった））は、源頼朝が平家打倒の挙兵をした際に早くから参陣して功績を挙げ、常陸国の守護に任ぜられた人物だ。頼朝の死後には幕府の集団指導体制「十三人の合議制」の一人となるなど、鎌倉で重きをなしていた（ちなみに来年のNHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』はこの時代が描かれる）。

しかし時を経るにつれて小田氏の勢力は衰えていった。十四代当主・政治（まさはる）の時代に勢いを盛り返すが、その晩年には再び斜陽が始まっていた。

本稿の主人公、氏治はその小田氏の十五代当主だ。父・政治の死去に伴い、一五四八年に十五歳（または十八歳）で家督を継いだが、小田領の北には北常陸の佐竹氏、西には下総の結城氏など、関東には古くからの有力大名がひしめき合い、新興大名である相模の後北条氏（以下、北条氏）も常陸など北関東に勢力を伸ばしつつあった。今日で言えば、名門の老舗企業が時代の変化とともに業績を落とし、新旧ライバルとの闘いに苦戦を強いられているようなイメージだ。

そんな中の一五五六年、小田氏の命運を左右する決戦が起きた。結城氏が北条氏の援軍を得て数千の兵で小田領に侵入、これを約二千人で迎え撃ったのだ。北条氏の援軍は、武蔵・江戸の遠山氏や下野の壬生氏、佐野氏など関東各地の強豪で構成されていた。北条氏が本格的に介入したことを示している。

海老ケ島の戦いと呼ばれるこの戦いは、開戦当初こそ小田軍が優勢だったが、次第に結城・北条連合軍に押しまくられ、数百人とも千人とも言われる兵が討ち死した。戦場近くの海老ヶ島城が敵の手に落ちたばかりか、本城の小田城も放棄せざるを得なくなり、小田城から東に約十キロ離れた土浦城に逃げ込んだ。

上杉謙信にも敗退、それでもあきらめず城を奪回

しかし氏治はあきらめなかった。わずか半年後には小田城の奪回に成功している。その後、十数年の間に少なくとも七回の落城と奪回を繰り返した。その間、戦う相手は結城氏や北条氏から、佐竹氏、上杉謙信などと移り変わるが、負け戦さが続くことは変わらなかった。

中でも大きな戦いとなったのが、一五六四年の山王堂の戦いだ。その三年前に上杉謙信が関東に遠征して小田原の北条氏を攻めた時、氏治は上杉方の小田原城包囲軍に加わったのだが、ほどなくして上杉から離反した。その頃には氏治は佐竹氏とも対立するようになっていたため、今度は上杉・佐竹連合軍に攻められたのだった。

謙信は関東の他の有力大名にも動員をかけ、氏治を圧倒した。一週間ほど攻防戦が繰り広げられたが、小田側は死者が千余人に達する大敗となり、氏治はまたもや小田城から逃れることとなる。入れ替わりに佐竹勢が小田城に入城、小田領の大半は佐竹氏の支配下に組み入れられた。

氏治はその翌年に小田城の奪回に成功するが、そのまた翌年（一五六六年）には上杉謙信と佐竹氏に攻められ、城明け渡しを余儀なくされた。

その後も何度も落城と奪回と繰り返したが、落城のたびに、小田氏の重臣が守る土浦城など近隣の支城に逃げ込み、そこを拠点に抵抗を続けたのだった。だが一五七三年頃を最後に、小田城を奪回することはできなかった。

こうして、最初に小田城を失ってから苦節三十四年の末の一五九〇年、氏治は佐竹氏に最後の戦いを挑む。しかしあと一歩のところで力及ばず、小田城奪回はかなわなかった。それどころか氏治のこの行動が、天下を握った豊臣秀吉の怒りを買ってしまう。佐竹氏が秀吉に服属していたためで、結局、氏治は領地をすべて召し上げられてしまったのである。ついに大名としての小田氏は滅亡した。

その後の氏治は、徳川家康の次男で結城氏の養子となった結城秀康（後に越前藩主・松平秀康）の客分となり、平穏な晩年を過ごしたという。

小田氏治の三つの〝隠れた強さ〟

それにしても、なぜ氏治がここまで戦い続けることができたのだろうか。そこには三つの「隠れた強さ」があったと、筆者は分析している。

第一は、どんなに苦境に陥っても決してあきらめない不屈の精神だ。彼は決して、城をまくらに討ち死するような戦い方をしなかった。常に「再起を期す」という強い意志があったのだろう。落城のたびに奪回に執念を燃やし、自ら敵陣に切り込んでいくことも厭わなかったという。当時の文献には「小田氏治は血気盛りの若大将」「累世無双の弓取りにて」などの記述が見られる。

第二は、そうした氏治の資質とブレない姿勢が家臣たちの信頼を集めていたことだ。これだけ戦いに負け続ければ、家臣が主人を見限って離れていったり謀反を起こしたりしてもおかしくなかったはずだが、多くの家臣は結束して氏治を守り、一緒に戦い続けたのであった。

第三は、領民にも強く慕われていたことだ。農民たちは新しい領主（佐竹氏の重臣など）に年貢を渡さず、密かに逃亡先の氏治に届けていたという。小田城を奪回する戦いには、こうした領民たちも参加したと伝えられている。

いずれも、現在の企業経営にも通じる要素である。トップの強い意志と姿勢、それに対する社員からの信頼と社内の結束、そして領民の逸話は、今日で言えば顧客や消費者からの高い信頼と支持に置き換えることができる。これらが、現代の厳しい時代を生き抜く原動力となることは間違いない。

ただ何と言っても、重要な戦いに勝てなかったことが最後まで大きく響いた。やはり他者に負けない強みを持つことが不可欠なのだ。これもまた、氏治の教訓である。

岡田 晃（おかだ あきら）
一九七一年、慶応義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ（米国現地法人）社長、理事・解説委員長を務める。二〇〇六年から現職。